

岡山市立公民館基本方針

中間評価

令和 8 年 3 月

岡山市教育委員会

中間評価の概要

■評価の目的

「岡山市立公民館基本方針」(平成31(2019)年3月策定)は、実施期間を令和12(2030)年までとし、中間年(令和7(2025)年)に前期の取り組みを評価し、中間年以降の基本方針の継続・見直しの判断材料とする。

■評価指標及び評価方法

下記の定量的な調査による重点4分野の推移を把握するほか、事業展開の結果、地域でどれだけの人々が活躍を始めたか、その結果どのような影響を地域に及ぼしたかの社会的インパクト評価を行うため、事業参加者アンケートと、特色ある事業の関係者へのヒアリング(※)による定性的なデータを把握し、職員で作る評価ワーキンググループが分析・評価を実施した。

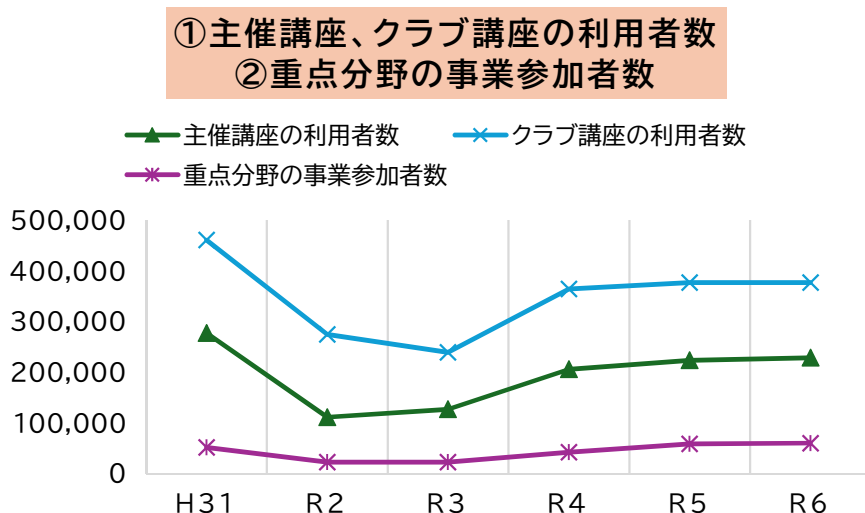
- ①～④ 事業全体
- ⑤～⑧ 重点分野「地域防災」 うち⑥は事業参加者アンケート
- ⑨～⑫ 重点分野「共生のまちづくり」
- ⑬～⑯ 重点分野「若者の地域参画」 うち⑮は事業参加者アンケート
- ⑰～⑳ 重点分野「地域づくり支援」 うち⑲は事業参加者アンケート

(※)特色ある事業の関係者へのヒアリング…4つの重点分野において、活動の変容がみられる特色ある活動を抽出し、関係者を対象にワークショップを実施

(1)事業全体

■評価指標①～④の結果

※R2、R3はコロナによる「まん延防止」「緊急事態宣言」による事業中止あり。以下同様。



評価指標		H31	R2	R3	R4	R5	R6
①	公民館利用者数(主催講座、クラブ講座の利用回数)	60,836	40,261	37,111	55,283	54,515	53,617
①	公民館の利用者数(主催講座、クラブ講座の利用者数)	737,316	385,172	365,117	569,635	599,842	604,673
②	重点分野の事業参加者数	51,063	22,375	22,521	41,663	57,990	59,724
③	新たに取り組んだ主催・共催事業の実施数	120	143	178	209	171	152
④	新たに公民館の主催・共催事業に参加した企業、団体数・	—	—	—	134	164	95

■評価指標①～④の結果分析

①主催講座は、回数、参加者数ともに、コロナ禍による事業自体の実施ができなかった影響で減少した。再開後は増加傾向にあるものの、平成31年度の回数や参加者数には回復していない。

クラブ講座は、コロナ禍による外出自粛が参加意欲の低下につながり、その後も活動が再開しなかった事例があったため、減少した。

②全市的な課題である重点分野の主催講座参加者数は、平成31年度と令和6年度を比較すると増加傾向にある。「重点」として位置付けることで、取り組みが進展することが見て取れる。

③新たに取り組んだ主催・共催事業の実施数は、コロナ禍の課題への対応として行った事業(フードドライブやスマホ講座、Zoomを複数館の連携に使用する等)の実施により増加している。

④令和4年度以降の3年間で、公民館の主催・共催事業に参加した企業や団体の数は393件に達し、新たな関係が構築された。

(2)未来をつくる(地域づくり支援)

方針修正版 P.3

■評価指標⑰～⑳の結果

評価指標		H31	R2	R3	R4	R5	R6	推移状況
⑰	公民館で、地域づくり活動を新たに始めた、または、新たに活動に加わった団体数	26	9	12	42	51	51	↗
⑱	公民館で活動する若者を受け入れた地域の団体数	9	5	7	15	27	37	↗
⑲	地域づくり活動参加による意識等の変化	アンケート結果(後述)						
⑳	公民館からの、地域づくり活動の情報発信数	77	82	89	97	106	106	↗

■評価指標⑰⑱⑳の結果分析

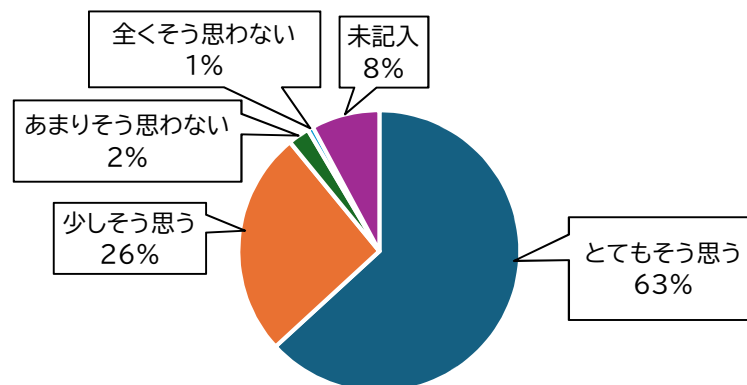
⑰地域づくり活動を新たに始めた、または、新たに活動に加わった団体数は増加している。

⑱公民館で活動する若者を受け入れた地域の団体数は増加している。

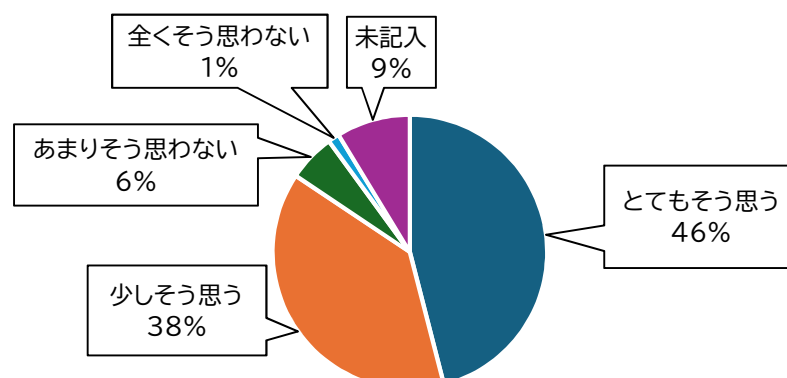
⑳公民館からの地域づくり活動に関する情報発信が増加している。

■⑲アンケート結果

Q 地域の人とつながったり関わることは楽しいと感じることができた



Q 地域活動やボランティア活動に参加したいと思うようになった



■ヒアリングから導き出された成果

事例:西大寺公民館 事業名:「雄神みんなで学校ごっこ」

概要:雄神学区の子どもから大人まで多世代が、地域に主体的に関わる機会を創出することを目的にしたもの。小学生や地域住民が自ら「センセイ」となって自分のできることを教えたり、「セイト」として体験したりと、楽しく学びあう活動で、兵庫県播磨町「みんなで学校ごっこ」を参考に実施している。

- ・従来の地域活動の枠組みとは違う、新たな地域内の交流の形が生まれた。
- ・地域の人々の世代を超えた交流が広がった。(特に、子どもたちと地域リーダー層の関わり、人間関係ができた)
- ・子どもが自信を持つようになり、主体的に関わる意欲が生まれた。
- ・学校と地域の連携が強まった。

■結果から

【 成 果 】

- ・地域づくり活動を新たに始めた、または、新たに活動に加わった団体数は増加しており、公民館を通じた地域づくり活動の広がりがあると言える。
- ・公民館で活動する若者を受け入れた団体数は増加しているが、若者が参加・参画する事業を行っている公民館に多く見られる。
- ・個別の地域課題(例:海ごみを削減するための学びや実践など)の解決に向けた取り組みへの支援が進んでいる。
- ・公民館からの地域づくり活動に関する情報発信が増えており、特に公民館だよりを活用して情報提供を行っている。活動をまとめた冊子や掲示物等を作成し、積極的に成果を発表している。

【 改善すべき点 】

- ・住民自身が地域の未来ビジョンを創り、未来づくり計画を策定する活動の支援には至っていない。
- ・公民館からのインターネットを活用した情報発信は、一部の館に限られている。

【 課 題 】

- ・子どもを中心に据えた取り組みを行うことで、保護者や地域住民が関わるなど、世代を超えた地域のつながりが強まる変化が見られた事例をモデルに、郷土への愛着と誇りを育成し、持続可能な地域づくりを促進していく。
- ・事業の見直しや新規講座の実施にあたっては、多様な主体の交流を意識し、関係各課との連携や研修などの機会を活用し、NPO や企業、地域団体との新たなつながりを築いていく。

(3) 共生のまちづくり

方針修正版 P.4

■評価指標⑨～⑫の結果

評価指標		H31	R2	R3	R4	R5	R6	推移状況
⑨	高齢者サロン運営者等の学習会の実施数	63	48	41	52	54	39	↘
	高齢者サロン運営者等の学習会の参加者数	1,136	1,026	965	1,111	1,236	865	↘
⑩	やさしい日本語講座等異文化間コミュニケーション向上のための講座等の参加者数	1,827	1,132	1,022	1,668	1,626	2,496	↗
⑪	障害者関係団体・保護者会と一緒に主催・共催事業数	19	16	15	17	19	21	→
⑫	男女共同参画・人権侵害防止に関する主催・共催講座の実施数	118	99	132	134	133	120	→
	男女共同参画・人権侵害防止に関する主催・共催講座の参加者数	2,414	2,084	2,063	2,050	2,854	1,963	→

■評価指標⑨～⑫の結果分析

- ⑨高齢者サロン運営者等の学習会の実施は、「生活支援サポーター養成講座」(現在は「支えるみんなの活動講座」以下同様)の回数が半減したことにより、その結果、実施数と参加者数がともに減少している。
- ⑩20館で、やさしい日本語講座等を実施した。
- ⑪障害者関係団体や保護者会と共催して事業を行っている館は17館で、事業数は増加しておらず、取り組みとしてはまだ少ない状況である。
- ⑫男女共同参画・人権教育に関する事業は全館で実施しているが、事業数と参加者数はともに横ばいの状況である。

■ヒアリングから導き出された成果

事例:足守公民館 事業名:「公民館カフェ」「生活サポートチーム ねこの手」

概要:高齢者の引きこもりを防ぎ、高齢者の集いの場となることを目指してカフェを開催し、くらしに役立つ情報を伝えあい、歌やおしゃべりを楽しんでいる。カフェの参加者やスタッフの会話の中で、介護保険では対応できないちょっとした困りごとがあるという実態がわかり、その困りごとに対してできることを、地域の人たちで支える仕組みをつくり活動している。

- ・公民館で開催した「生活支援サポーター養成講座」に参加した住民が、支え合いの大切さや他地域の事例を学び、自分たちの地域でも活動をしようと主体的な活動を始めた。
- ・ボランティアスタッフ自身の居場所となり、活動の場となっている。
- ・人と人とのつながりをつくることで、孤立を防ぎ、地域の人たちが元気になることに貢献している。

■結果から

【 成 果 】

- ・生活支援サポーター養成講座を社会福祉協議会と共催して、令和元年度から6年度まで全館で実施し、地域での支え合いの担い手の育成に寄与した。
 - ・令和4年度にモデル事業として示した「高齢者サロン交流会」は、運営者同士の交流やサロンの充実・活性化につながった。
- 同じく「やさしい日本語講座」は、実施館が増加し、外国人市民と地域住民との対話の機会をつくり、お互いを尊重し理解し合う機運が生まれた。

【 改善すべき点 】

- ・障害者関係団体や保護者会と共催して事業を行っている館は17館で、事業数は増加しておらず、取り組みとしてはまだ少ない状況である。

【 課 題 】

- ・障害への理解、障害者の生涯学習・社会参加を進めていくために、障害者団体や社会福祉法人などとの連携を進める。
- ・公民館への来館が困難な人々に対するアウトリーチを進める。
- ・外国人市民の増加に伴い、やさしい日本語講座などの取組を発展させ、多文化共生のまちづくりを推進していく。

(4)地域の防災力づくり

方針修正版 P.4

■評価指標⑤～⑧の結果

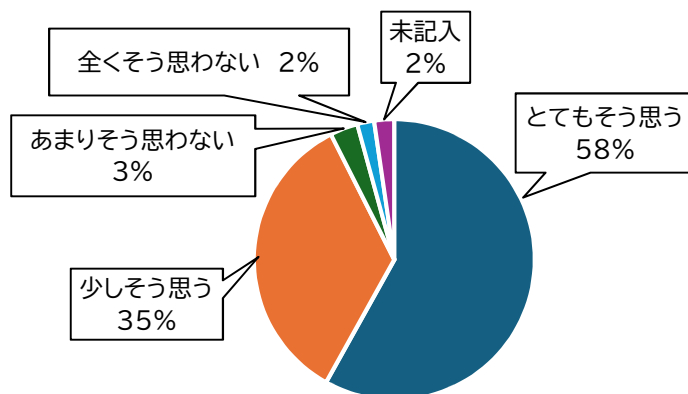
評価指標		H31	R2	R3	R4	R5	R6	推移状況
⑤	学校と公民館が連携した防災学習の実施数	13	20	22	39	50	50	↗
⑥	地域防災知識および行動の理解度	アンケート結果(後述)						
⑦	地域の防災組織や防災士と一緒にを行う主催・共催事業数	39	47	58	71	71	83	↗
	地域の防災組織や防災士と一緒にを行う主催・共催参加者数	5,543	2,038	2,494	5,506	6,718	7,864	↗
⑧	公民館の主催事業を通して、防災学習の担い手になった人数・・・277人							

■評価指標⑤⑦⑧の結果分析

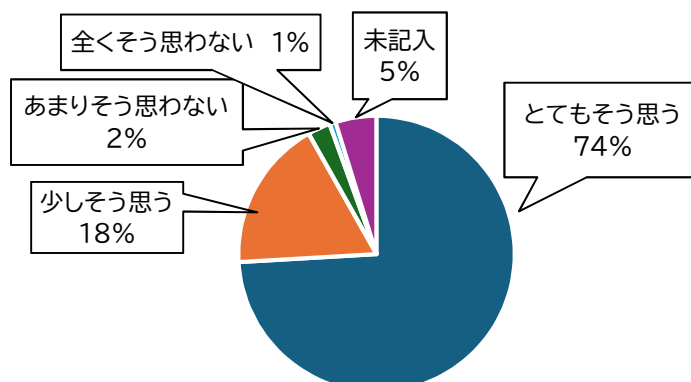
- ⑤学校と公民館が連携した防災学習の実施数は、H31と比較するとR6は3倍以上になっている。
- ⑦地域の防災組織や防災士と一緒にを行う事業数と参加者数、ともに増加した。
- ⑧この6年間で277人の防災学習の担い手が育成された。

■⑥アンケート結果

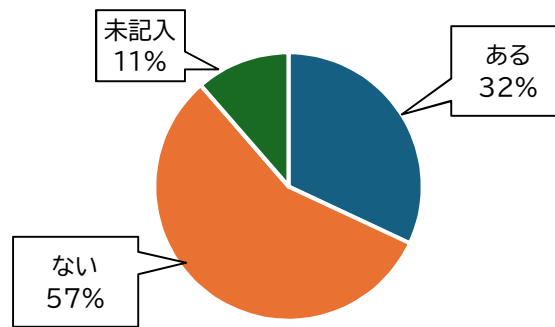
Q 地域について知識を得たいと思う



Q ご近所や地域の人とつながりをもって助け合うことが大切と思う



Q 今後 ご自身で新たに始めてみたい活動や さらに学びたいと思ったことがある／ない



■ヒアリングから導き出された成果

事例: 灘崎公民館 事業名: 「なださき防災フェスティバル」「防災はじめての一步」

概要: 小学生から大学生までの若者が防災学習を通じて、主体的に関わり、地域住民の交流を図りながら地域の防災力向上を目指す取り組みを行っている。

- ・知識と技能の習得により、防災意識が高まり、その後の具体的な行動変化が見られた。
- ・中学生が主体となり、体験型の楽しいプログラムを作ることができた。
- ・主体的に関わった結果、もっと地域に広げていきたい、という機運が生まれた。

■結果から

【 成 果 】

- ・学校と公民館が連携した防災学習を実施したことで、子どもたちの防災力向上に貢献した。
- ・防災・減災の備えについての実践的な学習をしたことで、参加者は増加した。
- ・防災についての知識だけでなく、地域の防災情報や地域の人との助け合いの重要性について、学習機会を提供した。

【 改善すべき点 】

- ・学んだことを実際の活動に活かしていくことや、さらなる学びへの関心を引き出していく必要がある。
- ・命に関わる防災の学習は、多様な人たちの視点を取り入れて進めていく必要がある。

【 課 題 】

- ・多様な人たちの視点を持ち、引き続き防災・減災の備えの学習機会の提供を行う。
- ・防災士等との連携による具体的な地域ニーズに応じた講座の実施を、継続していく。
- ・学校・地域と連携し、防災学習活動を継続的に実施することで、次世代を担う子どもたちの防災力を向上させるとともに、学習の担い手を育成していく。

(5)若者と地域をつなぐ

方針修正版 P.5

■評価指標⑬～⑯の結果

評価指標		H31	R2	R3	R4	R5	R6	推移 状況
⑬	中高生が参画する地域・社会活動に関する主催・共催事業の事業数	24	9	21	46	88	113	↗
	中高生が参画する地域・社会活動に関する主催・共催事業の中高生の参加者数	1,326	488	824	2,233	2,870	4,237	↗
⑭	大学生が公民館とともに企画実施する主催・共催事業の事業数	9	6	10	22	35	30	↗
	大学生が公民館とともに企画実施する主催・共催事業の大学生の参加者数	156	51	53	315	438	415	↗
⑮	中高生の地域活動参加による意識等の変化	アンケート結果(後述)						
⑯	地域学校協働本部と連携した取り組みを行う公民館数・・・7							

■評価指標⑬⑭の結果分析

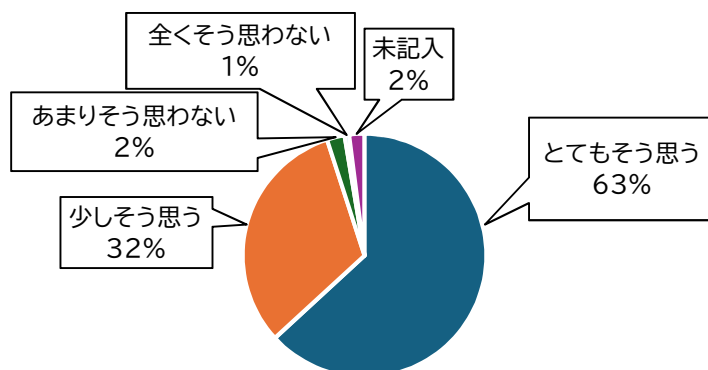
⑬中高生が参画した事業数や参加者数は、ともに大幅に増加

⑭大学生が公民館とともに企画・実施する主催・共催事業は20館で行われ、参加者数も増加

■⑮アンケート結果

当講座(活動)に参加したことで起きた気持ちの変化

Q 地域活動やボランティア活動に参加したいと思うようになった



■ヒアリングから導き出された成果

事例:高島公民館 事業名:「高島地域づくり隊」

概要:中高生の地域参画を目指す取り組みで、「高島の人を笑顔にする」をモットーに令和4年度から活動を開始している。活動を見守りサポートする大人の存在がある。地域行事の支援だけでなく、若者による独自企画の取り組みも実施している。

- ・自発的に発言や行動するようになった、考え方が柔軟になり他者への理解が深まった、地域のよさを認識し地域への愛着が深まったなど、中高生の意識や行動が変化した。
- ・活動を通じて、世代間のつながりが深まり、声をかけあう関係ができ、キッズ夏祭りなどの新たな地域のイベントを継続して実施するなど、地域に変化が生まれた。
- ・中高生と大人が尊重し合い、対等な関係が大切だということが共有されている。

■結果から

【 成 果 】

- ・全館で実施し、主に中高生ボランティアの取り組みが増加した。
- ・参加者は、地域活動やボランティア活動により興味を抱くようになった

【 改善すべき点 】

- ・主に中高生ボランティアグループへ、継続的に関わる地域の大人(NPO や企業、地域コミュニティ等含む)が少ない。
- ・地域学校協働本部は25団体が活動しており、そのうち7館は連携した取り組みを行っているが、まだ少ない状況である。

【 課 題 】

- ・先進的な取組を全館に広げていく。
- ・若者とともに活動する地域の大人の発掘と育成を進める。
- ・若者を地域の意思決定に関与する重要な主体として捉え、若者と大人が互いに尊重し合い、対等な関係を築くことが大切であるという意識を共有する。
- ・若者が関わった企画の活動実績や成果を報告し、次世代の参加を促進することや、地域に活動を広め、その成果を還元できるような工夫を行う。

(6)全体を通して

基本方針に基づく公民館の実践は、参加者の主体的な活動や地域の未来をつくる活動につながっており、有効性が高いことが明らかになった。

今後も、果たすべき役割については踏襲するが、その中で特に打ち出したいことを記載する。

- ・公民館事業への参加が難しい人々に対して、時間や場所、身体的条件、家庭環境などの要因を考慮し、参加機会の拡充をすすめる。
また、遠方の講師との接続やライブ配信の活用など、多様な学びの形を広げるための手段として ICT を積極的に活用していく。
- ・多様な人々が出会い、集い、市民一人ひとりが意見を表明できる場(プラットフォーム)の創出により、その声が企画や運営に反映されることで、共生社会の実現に向けた機運を高めること。
- ・試行的に導入した「参加型評価」の手法は、学習者が自らの学びを振り返り、課題を見付け出し、それを次の活動に活かすことに非常に効果的であった。このため、今後は、この手法を全館で取り入れ、事業や講座をさらに発展させていく。